第４章

特徴的な学校の取組

　児童生徒の学力の伸びが大きかったり、非認知能力・学習方略の数値が高かったりした学校を訪問し、学校で意識して取り組んでいることを聞き取りました。
　児童生徒の学力の伸びや、学力の下支えとなる非認知能力や学習方略を高めるために効果があると思われる取組を紹介します。

「子どもの主体性」を尊重した授業づくり、学級づくり
～鳥取市立明徳小学校～

１　とっとり学力・学習状況調査の状況

特に６年生で、学習方略が高い状況にある。昨年度からの変化としては、学力レベル、学習方略に伸びが見られ、主体的、対話的で深い学び、努力調整方略、認知的方略の伸びが顕著である。また、学力を伸ばした児童の割合が、非常に高い。

２　効果があると考えられる取組

【学級での取組】

（１）主体的に追究する姿を育成する授業づくり

①自分の意見をもち伝え合うフリートーク

フリートークで考えを伝え合う

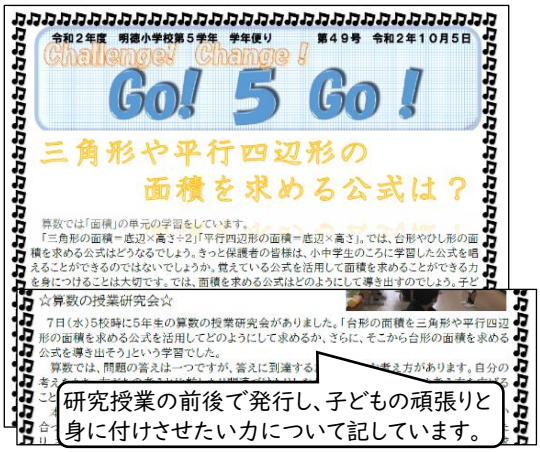
「学び合いの時間は、自分の考えをもつところから始まり、交流により深まる」と考えフリートークでの伝え合いに取り組んでいる。特に算数では、子どもたちのフリートークで授業を展開していく。その際、得意な子どもだけでなく、苦手な子どもの考えを生かしながら進めている。そのために、苦手な子どもの理解度やつまずいているところを探り、その子どもたちの考えを切り口にして学び合いを始める。そして、得意な子どもたちがその考え方を引き継いで、より具体的で一般化した考えへと醸成していく。この過程を丁寧に行うことで、子ども一人一人が、「わかった！できた！」と納得して学習が終えられるように心がけている。また、振り返りをノートに書かせ、毎時間個々の学習の定着度や次時への意欲などを把握し、個に応じたコメントを返している。これらの取組が、主体的、対話的で深い学びや認知的方略の伸びにつながっていると考えられる。

②満足感と次への意欲を感じさせる適用題

「最後まで分からないと気が済まない子どもの育成」を意識し、こだわりをもって追究することを大切にしている。特に算数の授業では、適用題の時間に練習問題が解けて満足して終わるだけでなく、知的好奇心を喚起するような問題を準備するようにしている。そのために大切なことは、「できるようになりたい」という気持ちをもたせることである。適用題の内容を工夫することで、その気持ちがより高まると考えている。まずは、教科書にある練習問題を解かせる。これは、すべての子どもに解かせたい。解けない子どもには、その時間を使って個別に対応する。さらに、本時のまとめを生かし、既習事項も駆使しながら考える手応えのある問題も準備する。これにより、活用する力も育成していく。その問題作成のヒントの一つとして「小学校算数単元到達度評価問題」を利用している。「学習したことを使えば解けるはず、絶対に解きたい、解けるようになりたい」という気持ちをもたせて授業を終えることで、次時の学習への関心も高まり、より積極的で主体的な学びにつながるとともに、努力調整方略の向上にも効果があると考えられる。

③家庭と学級をつなぐ学級通信

家庭とつながり、子どもの主体性やコツコツ取り組む態度を育成するきっかけに学級通信を活用している。内容は、学校行事や日々の学校生活、授業の内容や子どもたちの頑張りなどであるが、意図的に子どもがつまずいている学習内容などを紹介し、その解決に向けて学校で取り組むことや家庭でお願いしたいことなどを入れ込む。保護者への情報提供と協力依頼を兼ねた通信を発行することで、子どもたちが、学校でも家庭でも、安心して質問したりより高い目標や課題の解決に主体的に取り組んだりしたくなるような手立てとしてい



令和２年度　明徳小学校第５学年　学年便り　　第４９号　令和２年１０月５日

Challenge! Change!

Go! 5 Go!

三角形や平行四辺形の
面積を求める公式は？

算数では「面積」の単元の学習をしています。

「三角形の面積＝底辺×高さ÷2」「平行四辺形の面積＝底辺×高さ」。では、台形やひし形の面積を求める公式はどうなるでしょう。きっと保護者の皆様は、小中学生のころに学習した公式を暗えることができるのではないでしょうか。覚えている公式を活用して面積を求めることができる力を身につけることは大切です。では、面積を求める公式はどのようにして導き出すのでしょう。子ど

☆算数の授業研究会☆

７日（水）5校時に5年生の算数の授業研究会がありました。「台形の面積を三角形や平行四辺形の面積を求める公式を活用してどのようにして求めるか、さらに、そこから台形の面積を求める公式を導き出そう」という学習でした。

算数では、問題の答えは一つですが、答えに到達する

研究授業の前後で発行し、子どもの頑張りと身に付けさせたい力について記しています。

る。学習が苦手な子どもも意欲的に学べるよう、まずは、自分の苦手な分野や内容を自覚することが大切だと考えている。その上で、学校での学習だけでなく、自主学習ノートを活用した家庭での学びも主体的に取り組めるように、学級通信を通して、家庭を巻き込み、子どもへの応援の一翼を担っていただく。このような取組が、課題意識をもった家庭学習や主体的に学ぶ授業づくりに効果があると考えられる。

（２）集団で考え判断し行動する「リーダー集団」の育成

意見を出し合いシナリオを作成中

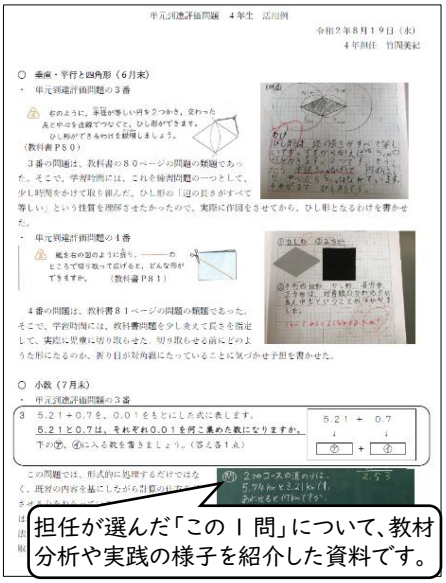
学級においてリーダー性の育成も大切にしている。しかし、このリーダーとは一人の代表ではなく、周りの子どもたちも含めてリーダーとしての意識と協働的に活動する素地をもつ集団のことを指している。表に立つ子どもが、ある時は裏方として集団を支えたり、その逆だったりと、学級集団として、学習時間、学校行事、地域活動などに関わっている。例えば、学習発表会では、シナリオ担当や現場監督、タブレット担当など自分たちで役割を考え出し、一人一人が学級としての一つの目標に向けて関わる姿が見られた。担任は、子どもたちが悩んだときに「どう思うの。」と投げかけ、子どもたちに考えさせ、自分たちで解決策を見出し、互いにカバーし合いながら活動を進めていく姿を見守っている。これらの関わりが、主体性の育成につながっていると考えられる。

【学校全体での取組】

（１）全職員による授業力向上

①小学校算数単元到達度評価問題の活用

昨年度から本問題を教材研究に生かした授業づくりを実践している。毎月配信された問題を担任が解き、職員室内で情報交換を行う中で、授業づくりのヒントが生まれる。そして、問題の数値を変えて適用題に活用したり、単元末にテストを実施して個別指導に生かしたりしている。また、１年に１回、担任が話題にしたい問題を選んで、教材研究したことについて全職員で共有する研修会を行っている。これらの積み重ねにより、職員一人一人が身に付けさせる資質・能力を明確にした教材研究に努め、子どもたちに力を付ける授業実践に意欲的に取り組んでいる。



単元到達評価問題　４年生　活用例

令和２年８月１９日（水）
４年担任　竹岡美紀

○ 垂直・平行と四角形（６月末）

・ 単元到達評価問題の３番

右のように、長さが等しい円を２つかき、交わった点をやわらかい線でつなぐと、ひし形ができます。
ひし形ができるわけを説明しましょう。
（教科書P８０）

３番の問題は、教科書の８０ページの問題の類題であった。そこで、学習時間には、これを練習問題の一つとして、少し時間をかけて取り組んだ。ひし形の「辺の長さがすべて等しい」という性質を理解させたかったので、実際に作図をさせてから、ひし形となるわけを書かせた。

・ 単元到達評価問題の４番

紙を右の図のように折り、＿＿＿＿のところで切り取ってひろげると、どんな形ができますか。　（教科書P８１）

４番の問題は、教科書８１ページの問題の類題であった。そこで、学習時間には、教科書問題を少し変えて長さを指定して、実際に黒板に切り取らせた。切り取らせる前にどのような形になるのか、折り目が対角線にたっていることに気づかせ予想を書かせた。

○ 小数（７月末）

・ 単元到達評価問題の３番

３　５.２１＋０.７を、０.０１をもとにした式に表します。
５.２１と０.７は、それぞれ０.０１を何こ集めた数になりますか。
下の㋐、㋑に入る数を書きましょう。（答える１点）

５.２１　＋　０.７
↓　　↓
㋐　＋　㋑

この問題では、形式的に処理するだけではなく、既習の内容を基にしながら習熟の

担任が選んだ「この１問」について、教材分析や実践の様子を紹介した資料です。

②全国学力・学習状況調査の活用

６年生の結果を受けて、最も正答率が低かった問題を全職員で解き、課題を分析し、１～６年生までの各学年で身に付けさせるべき力を確認する研修を行っている。指導事項の系統性を意識した授業実践のきっかけとしている。

③学力向上推進校事業、指導力向上ゼミナールでの学びを全職員で実践

令和２年度から、県のスーパーバイザー派遣事業を受けている。昨年度は、環太平洋大学の前田一誠教授に子どもたちが協働的に学び合う授業づくりについて指導を受け、今年度は、島根大学の下村岳人講師に、ＩＣＴを取り入れた算数の授業づくりについての指導を受けている。学校課題に応じた助言を受け、全職員で協議し授業づくりに生かすことができている。また、指導力向上ゼミナールで「算数（Ｒ２）」「ＩＣＴ（Ｒ３）」を続けて受講することができた。その内容を伝達し、試行錯誤しながら全職員で実践することもでき、職員集団の同僚性も高まっている。

（２）安定して学校生活を送ることができる環境づくり

ここ数年、全員出席の日数が増加している。平成３０年度４０日、令和元年度６６日、令和２年度９１日、今年度は１２月１５日現在で８０日である。これは、地域や家庭の教育力もさることながら、学校生活を安心して送ることができる安定した環境がその理由と考えられる。子どもたちが安心して過ごせる学級づくり、情報共有と共通実践に努める職員集団、子どもの関係性に気を配った支援等の成果であると考えられる。

やる気をアップ！主体的に学ぶ仕掛けづくり
～鳥取市立面影小学校～

１　とっとり学力・学習状況調査の状況

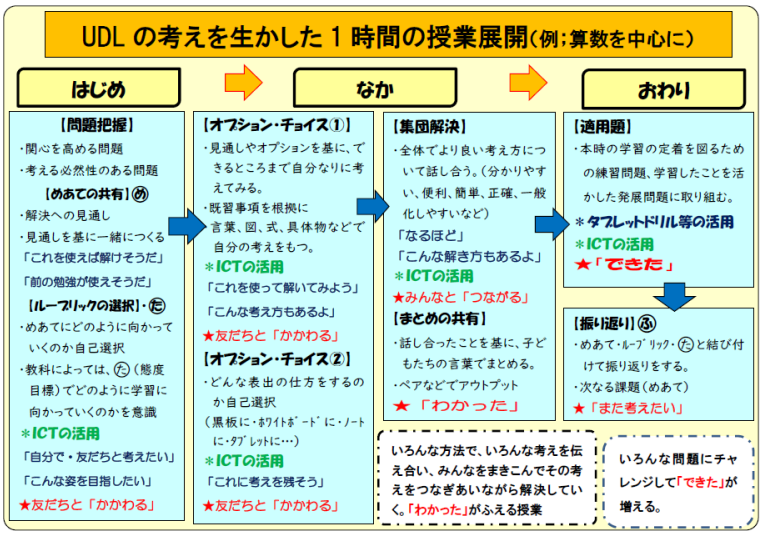
特に６年生で、国語・算数における学力レベルの伸びが県平均より高い状況にある。特に算数においては顕著な伸びが見られた。

２　効果があると考えられる取組

（１）子どもが主体となる授業づくり

①授業づくりのスタンダードで共通実践

面影小学校では､｢全ての子どもが学習に参加できる授業に｣｢子どもが主体となる授業を｣という思いで早稲田大学大学院教育学研究科の高橋あつ子先生のＵＤＬの考えを取り入れた算数の授業づくりに取り組んでいる。その考えを基に教師一人一人の授業力の向上と主体的に学ぶ児童の育成のために、授業づくりのスタンダードを校内で作成し、共通実践している。



授業づくりのスタンダード

②ルーブリックでやる気アップ

子ども達が学習に前向きになるには、学習が楽しいこと、わかることが前提となる。そのために誰もが学習に取り組めるようＵＤＬの視点を取り入れた授業づくりを学校全体で取り組んでいった。授業の中では、めあての設定後、教師がルーブリックを示し、自分でレベルを決めることで子ども達のやる気を引き出している。また、学習の最後の振り返りだけでなく、自分で決めた目標が達成できたかを確認する作業も取り入れ、今日の時間の頑張りを自分で評価することに取り組んでいる。教師は学習の評価とは別に、それぞれの目標が達成できたかを見取ることができ、子ども自身の頑張りを評価することができる。子ども達自身も学習の理解だけでなく、学習への取組状況を教師に評価してもらえることで学習に意欲的になり、その意欲が学習への前向きな意欲になり、自ら学ぼうとする意欲の向上や努力することの大切さを身に付けることにつながっていると考えられる。

	それぞれの考えの良いところをみつけることができる
	いくつかのわけを考えることができる
	自力でわけを１つ考えることができる
	教科書を見たり、友だちに教えてもらったりしながらわけを考えることができる

小数のかけ算においてのルーブリック

③それぞれの学び方でやる気アップ

算数の授業の中では、自分に合った方法で問題解決に向けて考えることにも取り組んでいる。「オプション（場の設定）・チョイス（子どもが選択する）」という考えを前提に、課題解決をするために自分の好きな方法で学習している。友達とホワイトボードを使って学び合う子もいれば、１人でノートに向き合い考える子、ヒントカードを使い相談する子など、教師は学ぶ環境をいくつか用意し、子ども達の学びを止めない準備をしている。そうすることで、子ども達は主体的に課題解決に取り組み、考えることに前向きに取り組むことができるようになっている。

友達とノートを使って考えたり、黒板の図で考えたりとそれぞれが考えやすい方法で学びます。

（２）着実に力を付けるための取組

①適用題への架け橋問題でやる気アップ

学習問題をみんなで解き終わった後に、すぐに適用題に取り掛かるのが一般的であるが、もう一度確実に解けるかどうか、数値を変えるなどして同じ問題に取り組んでいる。確実に問題が解けることを確認するとともに適用題の準備にもなっている。学習問題が自力で解けなかった子にとっては、自分で解けることに喜びを感じることで自信につながると考えられる。基礎・基本の定着と同時に「わかった」「できた」が実感できる取組と考えられ、適用題へのステップになるとともに算数に対する意欲にもつながると考えられる。

②朝の時間に学力アップ（チャレンジタイム）

朝自習の時間を有効活用し、学力向上をめざしている。昨年度まではチャレンジタイムとして午後に１０分の帯時間を設け、月・火曜日は算数を、木・金曜日は国語を中心に基礎学力の定着と学力アップに取り組んできた。算数では百マス計算や基本的な問題に取り組み、国語では短文や長文の読解問題に取り組んでいる。本年度からはチャレンジタイムを朝自習の時間に変更したが、毎週火曜日は算数での百マス計算、フラッシュカード、算数音読などに取り組んでいる。また、毎週金曜日は、読む力や書く力を伸ばすために、引き続き国語の読解問題に取り組んでいる。どの教科にも通じる読む・書く力の育成を大切に、継続して取り組むことで学力の向上が期待できると考えられる。

（３）学びの土台作り

○桜咲（さくさく）タイム

友達の意見をうなずきながら、否定せずに聞きます。

桜咲タイムとは、鳥取市立桜ヶ丘中学校区で行っている取組である。週１回、１０分間で行う短時間グループアプローチであり、自他理解や自尊感情を高め、良好な人間関係作りを行うために、１グループ４人程度になり、テーマについて一人一人が話をしていくものである。話合いでは、話の仕方や話の聞き方（うなずき、視線、表情等）のルールやマナーを身に付けることを大切に進めているため、自分の考えや感じていることを聞いてもらえるという体験をとおして、他者から認められることを感じたり、話合いのスキルを身に付けたりすることができる。子どもたちは安心して取り組めるため、この時間が学習の土台作りとなっており、授業における話合い活動（桜咲トーク）が活発になることで、学力向上につながっていると考えられる。

みんなの前向きな心を育てる
～八頭町立船岡小学校～

１　とっとり学力・学習状況調査の状況

５年生、６年生において学習方略、アクティブ・ラーニングともに全ての項目が県平均を上回る状況にある。さらに４年生もほとんどの項目において学習方略が県平均を上回る状況にある。

２　効果があると考えられる取組

（１）「出会い・感動・発奮」をキーワードにした実践

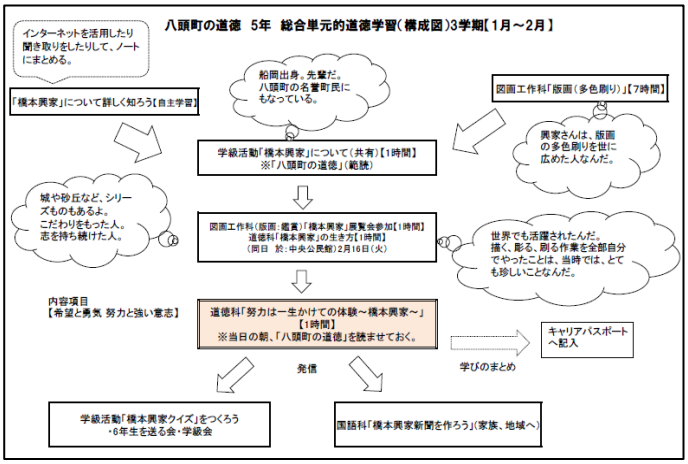
①「特別の教科 道徳」を要とした学校運営

「『笑顔』と『活力』に満ち満ちた学校づくり」をコンセプトに、みんな（児童、教職員、保護者）の前向きな心を引き出すことを大切にしながら、活気ある学校づくりを進めている。その取組の中心に道徳教育を位置づけ、道徳科の授業を要とし、学校教育全体を通して道徳性を養うことで、みんなの前向きな心を育てている。特に「人の生き方に学ぶ」ことを大切にし、その人物の背景にあるものを考えたり、自分なりの人物像を描いたりすることで自己の生き方を見つめ直すことや人との出会い・つながりを大切に思う心情が育成されており、身近な友達や教職員、地域の方々との良好な関係が学習を支える基盤となっている。

道徳科の授業風景

②「八頭町の道徳」を中心とした総合単元的な道徳学習

道徳科の授業で学ぶことや学んだことと関連する内容を各教科の内容と結び付けて学習している。特に「八頭町の道徳」に掲載されている人物について、先人の生き方に触れる学びを行い、自分を見つめ直すことや努力することの大切さ、夢を追いかける姿勢など様々なことを学ぶ機会としている。その人物の偉大さや功績を学ぶとともに、社会や理科、図工などと往還させながら学んでいる。その人物の生き方に何度も触れることや、道徳の授業で学んだことを振り返ったり、視野を広げたりすることを通して、基礎的・汎用的能力（人間関係形成能力や自己理解等）が育っていると考える。また、これらのことを通して八頭町を思う気持ちを育てる「ふるさとキャリア教育」にもつながっている。



③「輝プロジェクト」の出会いから学ぶ取組

普段なかなか出会う機会のない「本物」や「一流」の人物との交流にも力を入れている。八頭町出身でオリンピックマラソン銀メダリストの森下広一さんをはじめ、オリンピック体操銀メダリストの池谷幸雄さん、八頭町出身の写真家水本俊也さんなどの専門家に話を聞くだけでなく、実際に指導してもらい学習に取り組んでいる。一流の専門家から実際に指

池谷幸雄さんによる体操教室

導してもらうことで、コミュニケーション能力はもちろん、今後の自分自身の可能性を含めた自己理解や、従来の考え方や方法にとらわれず物事を前に進めていくことなど様々なことを学ぶ機会となっている。それらのことが柔軟的方略や人的リソース方略、プランニング方略に影響していると考える。

水本さんによる写真の指導

④地域の人・専門家から学ぶ取組

総合的な学習の時間でＪＡの方に田植えの仕方を教わったり、社会福祉協議会の方に車椅子体験をさせていただいたり、図工では博物館の学芸員に図工の学習をしていただいたりと、たくさんの方に関わっていただいている。また、地域の方とは読み聞かせや家庭科の支援など度々関わる機会があり、その一つ一つの出会いの中から新たな発見を生み、課題を見つけ、解決していこうと前向きに取り組む姿勢を養っている。このことが努力調整方略や人的リソース方略に影響していると考える。

図工「線の森に入っちゃおう!」で学芸員さんに指導してもらいました。

総合的な学習の時間「人に優しい町づくり」で車椅子体験をしました。

（２）「１０の視点」を活用した授業改善

①めあてと振り返りを意識した授業づくり

授業の中では、めあてやまとめを子ども達の言葉を使いながら行うことで、学習に対しての意欲をもたせるようにしている。自分たちでめあてを決めることで、前向きに課題解決に向かおうとする意欲の向上をねらっている。また、これらのことが、柔軟的方略や努力調整方略に影響していると考えられる。

②学び合う活動を大切にした授業づくり

子どもは「わかった」「できた」と思わないと学習に意欲が出ないため、授業後半の適用題等では必ず解けるように、学習の中に子ども達同士で意見の交流ができる場面を設定している。普段、みんなの前では聞けないことも少人数になると聞ける子もいるので、まだ理解できていない子にとってはその時間が手助けとなっている。また、授業の中で間違えることは当然ありえることであり、その間違いが考えるヒントになり、学習を深めていくことも多々ある。間違いを大切にした授業づくりも行うことで、子どもは間違いを恐れなくなり、安心して発言できる雰囲気になる。また、「わからない」が言える環境づくりも含め、子ども達同士がお互いを認め合い、助け合えることを授業の中でも大切にしている。これらのことが、人的リソース方略、認知的方略に影響していると考えられる。

学び合う時間を大切にした授業づくり

③アウトプットを大切にした授業づくり

子どもたち同士の交流を大切にしているが、答えを教えるのではなく自分の言葉で説明することを意識して取り組むようにしている。教える子にとっては、知識として蓄積したことをアウトプットすることで、より確かな学力が身に付くようになり、教えてもらう子にとっては学習を進めるうえでの手立てとなり、相乗効果となっている。また、普段から発表する際には、その理由を加えて発言することを求めることで、表現力や筋道を立てて考える力が育っている。これらのことが認知的方略に影響していると考えられる。

確かな基盤のもとに行う集団づくり・学びづくり
～倉吉市立西郷小学校～

１　とっとり学力・学習状況調査の状況

４～６年生ともに、主体的・対話的で深い学びの実施、学習方略のほぼ全ての項目で県平均を上回っている。特に、柔軟的方略、認知的方略、努力調整方略の３項目は、３学年全てに共通して、県平均を顕著に上回っている。

「３学年全てに共通して」という事実の背景には、学校全体としての風土や基盤、特徴的な取組等があるのではないかと考え、聞き取りを行った。

２　効果があると考えられる取組

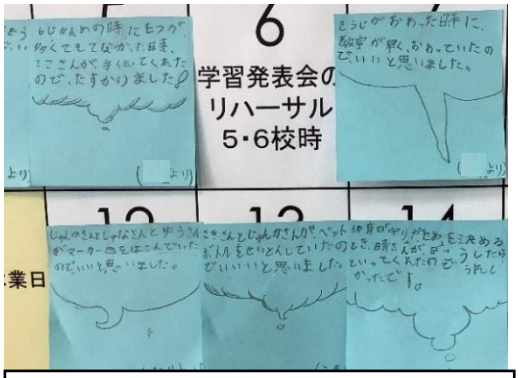
（１）学校全体で取り組む確かな基盤づくり

校訓「 至誠 創造 協働 」に込められた児童の姿を目指して、日々の学校教育が行われている。学校・学年全体の足並みを揃えながら協働的に取組を進めることがとても大事にされ、児童の生活や学習へ着実に繋げていく体制が築かれている。また、あいさつ、返事、靴揃え等々、集団生活の中で当たり前にすべきことを地道に徹底・継続することも大事にされている。こうした確かな基盤づくり、年間を通した一つ一つの徹底・継続が、児童の生活の安定や向上、自信の獲得へと繋がっていることを教員自身が実感している。

（２）ともに認め合える学級集団づくり

①良いところ見つけの取組

「ヒーロー・ヒロイン見つけ」「ほめほめタイム」等、学級によって名称は様々だが、全学年で共通して「友達の良いところ見つけ」の時間が位置付けられ、継続的に取り組んでいる。「人の良さを見つけられる・見つけてもらえる」温かい関係づくりを目指して、集団への所属感や安心感を醸成する場となっている。児童から出された多くの素敵な姿を可視化して残す工夫も行われている。例えば、カレンダーにその日の「ナンバーワン」を記録（担当係の児童が認定）したり、「○月のキラリ」と題して記録したりする取組等が見られている。



児童の素敵な姿を可視化する例：１日に１枚ずつ、児童直筆のコメントが貼られている。

②「学級チャンピオン」

①の発展的な取組として、児童の自己肯定感アップのために、ある学級では「学級チャンピオン」という取組が行われている。「～と言えば誰？」というお題の学級アンケートをもとに、「～チャンピオン」として学級全員の名前をリストアップする。友達の良さや頑張りを認めたり、自己の良さに気付いたりできる取組である。これをもとにして、児童が１人１台タブレットを活用しながら、自己のウリや自慢を「チャンピオンポスター」として表現するという魅力的な活動もなされている。

児童自らが「友達の良い姿を見つけよう」「自分の言葉にして伝えよう」「振り返って考えてみよう」という気持ちを抱かせるような場づくりや環境づくりがなされている。このことが、柔軟的方略、認知的方略等の学習方略の育成にも繋がりがあるのではないかと考えられる。また、集団に安心感や居心地の良さが生まれてくると、分からないことが素直に「分からない」と言い合

える、自然と教え合いながら高め合うことのできる学習集団づくりにも繋がっていく。日頃から、このような集団づくりをめざして一つ一つの取組が進められている。

（３）自分の言葉で伝える・まとめる機会の設定と継続

①「つなぎ発言」の話型活用

授業での話合いの際には、児童が聞き取った友達の発言内容をさらにつないで発言できるように、全学年で「つなぎ発言」の話型を活用している。児童が主体的に発言をつないでいくことで学びを深めていけるよう、授業での対話や話合いの場面が位置付けられ、その中で話型に例示されている言葉を活用するようにしている。児童が徐々に発言をつなぐための言葉を獲得して、表現力のスキルアップを図ることができるように、つなぎ方のレベルを示す等の工夫もなされている。

つなぎ発言を全学級に掲示し活用する例
全学級に掲示され活用されている。今年度は、新たに始まった算数科の研究を踏まえて内容を改良。校内研究では、めざす児童の姿に向けて、足並みを揃えた活用が進行中。

②教え合い

授業中の児童同士による教え合いをとても大事にしている。そこでは、自然と教え合っている場面や友達に寄り添いながら懸命に教え合っている児童の姿が見られている。そうした教え合いの中で、自分の言葉で友達に説明したり、分からないことを尋ねたりすること、相手に分かってもらえるように工夫したりすることが、知識の再構成や深い理解（認知的方略等）にもつながっていると考えられる。

友達に寄り添いながら、相手が納得するまで教え合う姿が日常的に見られている。学級集団づくりがその基盤になっている。

③自ら調べようとする児童の姿をめざした働きかけ

家庭学習の一環として行っている自主学習（自学）では、授業で感じた疑問に対して自ら調べてくる児童や、その日の授業でのポイントをまとめてくる児童の姿が多く見られる。気になる言葉があれば、すぐに辞書を使って調べようとする児童の姿も多く見受けられる。こうした自ら調べ出す児童の姿の背景には、教師がさりげなく児童に「それ、調べてきたらどう？」「〇〇さんがそのことを調べていたよ」「自学でまとめてきてもいいよ」等、次の行動を促す言葉かけをこまめに行っていることや、調べてきた児童の姿・ノート等を取り上げて拡げていること等の働きかけがあり、児童が主体的に動き出すような教師の言葉かけやきっかけづくり、環境づくりが行われている。

以上のように、「学校全体の確かな基盤づくり」のもと、「ともに認め合える学級集団づくり」が、毎日の授業における「自分の言葉で伝える、まとめる機会の設定と継続」の中でも大事に進められている。それが、柔軟的方略、認知的方略、努力調整方略等の学習方略の育成にもつながっていると考える。また、校訓に込められた教育理念を全教職員で共有し、「みんなでやろう」という意識の高い教職員集団が、めざすものへ向かって一つ一つ試行錯誤を重ねながら取り組んでいる。それが、西郷小学校の「強み」であり着実な成果にもつながる要因であると考える。